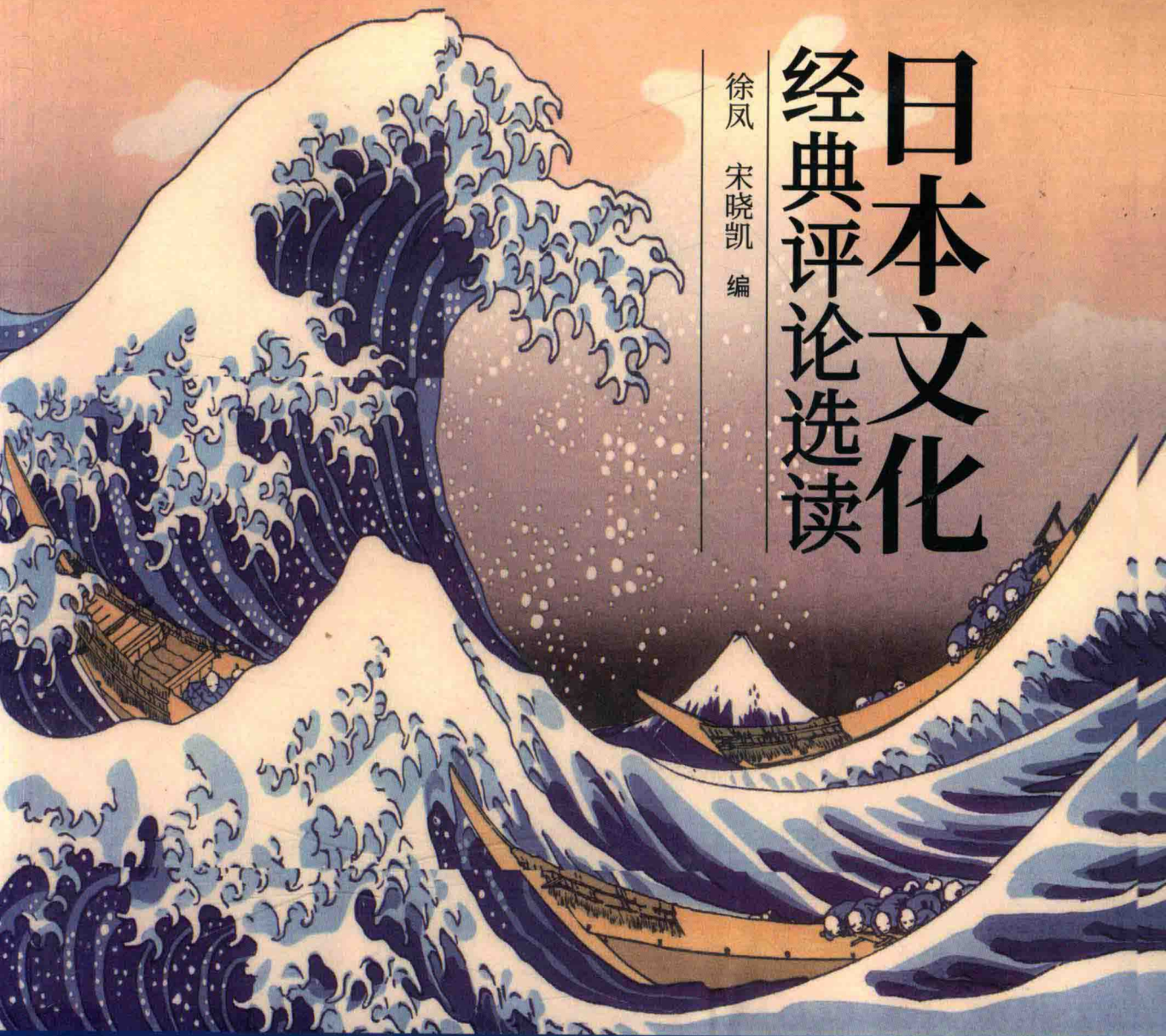


日本文化 经典评论选读

徐凤
宋晓凯
编



为直观解读日本民族思想和日本文化精髓提供原始语料

为全面认知日本文化形态提供广泛新颖的独特视角

为研究日本文化精神提供更多国内外学者的代表性观点

本教材获得曲阜师范大学建材建设立项资助(项目编号: 2013jc034)

日本文化 经典评论选读

徐凤 宋晓凯 编



黑龙江朝鲜民族出版社

2017·哈尔滨

图书在版编目(CIP)数据

日本文化经典评论选读 / 徐凤, 宋晓凯编. — 哈尔滨: 黑龙江朝鲜民族出版社, 2017. 6
ISBN 978-7-5389-2311-7

I. ①日… II. ①徐… ②宋… III. ①文化研究—日本 IV. ①G131.3

中国版本图书馆CIP数据核字(2017)第114075号



书名 / 日本文化经典评论选读
编者 / 徐凤 宋晓凯
责任编辑 / 姜哲勇
责任校对 / 赵海霞
封面设计 / 崔林军
出版发行 / 黑龙江朝鲜民族出版社
发行电话 / 0451-57364224
电子信箱 / hcxmz@126.com
印刷 / 牡丹江新闻传媒印务有限公司
开本 / 787mm×1092mm 1/16
印张 / 15.25
字数 / 250千字
版次 / 2017年6月第1版
印次 / 2017年6月第1次印刷
书号 / ISBN 978-7-5389-2311-7
定价 / 35.00元

前 言

中日两国文化交流历史悠久，两国文化在很多地方可谓同根同源并各有千秋。很多中国文化传入日本以后，在不断发展和演变中，逐渐具有了日本特色的本土特点，有的甚至成了日本传统文化的代表，比如日本茶道、书道等；还有一部分中国文化或思想传入日本后，催生了崭新的日本文化，比如：日本神道就是在吸收中国道教思想后逐渐形成的，日本阴阳道就是在吸收中国阴阳五行思想后才逐渐形成的。诸如此类，日本文化与中国文化有着密不可分的历史渊源。中日两国学者或相关人员在中日文化比较研究领域进行了多视角多方位的研究，取得了众多研究成果，为解读中日两国文化提供了新思路。但对于中国高校日语专业的教师或学生来说，阅读日本文化经典评论原著，特别是日本经典文化的经典评论原著，更有利于直观理解和把握日本文化的精髓及本质。

目前为止，中国国内面向高校日语专业高年级学生所用的日本文化方面的图书很多，有《日本历史与日本文化》（内藤湖南著，刘克申译）、《日本的社会与文化》（伊藤公雄著，张文颖译）、《禅与日本文化》（铃木大拙著，钱爱琴译）、《日本的八个审美意识》（黑川雅之著，王超鹰译）等日本学术专著的中译本，也有《日本文化通史》（叶渭渠著）、《日本文化》（王勇著）、《神道与日本文化》（崔世广著）、《中国哲学与日本文化》（徐水生著）等中国人的学术著作，还有《岩松看日本》（白岩松著）、《日本微观文化解析》（刘小荣编）、《日本文化透视》（杨薇著）、《日本社会文化读解》（王秀文编）等大众阅读系列的图书。但学生专用的有关日本文化概论方面的教材目前仅有《日本文化概论》（韩立红编著）、《新编日本文化概况》（陈岩、崔香兰编著）、《原典：日本文化论》（王秋菊编著）这三种，在综合考虑和借鉴以上三种教材编著特点的基础上，本书在内容上既涵盖了宏观的日本文化的杂种性、日本文化的结构、日本精神文化、日本思想文化、日本政治文化、日本人的心理文化、禅与日本文化、日本耻感文化、日本文化与中国文化等形而上的经典

内容，也涵盖了日本的住宅文化、家庭文化、动漫文化、庭园文化、美术文化、性文化等形而下的微观内容，还涵盖了国内比较少见的日本皇道文化、日本香道文化、日本演剧文化、日本纸文化等日本特色文化。从内容特点来看，既有评论，也有介绍；既有大众读物系列著作的节选，也有学术著作的节选；既有原著内容的摘选，也有作者信息的补充；既可以为研究者提供第一手的日文原始资料，也可以为日本文化的学习者提供广泛真实的原典评论和介绍，在阅读日文原典的过程中，能够理解日本人对日本文化的主要观点和看法，也能够加深对中日文化比较方面的新体会和新感触，以便在今后的学习和研究中，更直接更全面地捕捉日本文化特点和中日文化的异同点。

在国家实施中国传统文化“走出去”的战略背景下，在中国“国学热”的流行趋势中，这本《日本文化经典评论选读》的出版，可以促使我们中国高校日语专业的教师和学生通过加深对日本文化的理解来反思中日两国传统文化“同源不同流，同根不同叶”的原因所在，对反观中日文化开放包容、交流互补的当下价值，具有非常重要的意义。由于时间所限和能力所限，错误之处在所难免，敬请业内同人批评指正。

徐凤 宋晓凯

2016年8月20日

目 录

第一课	日本文化的杂种性	01
第二课	日本文化的结构	19
第三课	日本精神	29
第四课	日本的思想	37
第五课	日本的政治文化	52
第六课	日本人的心理文化	62
第七课	禅与日本文化	69
第八课	日本的住宅文化	86
第九课	日本的家庭文化	97
第十课	日本的阴阳文化	109
第十一课	日本的耻感文化	121
第十二课	日语与日本文化	134
第十三课	日本的性文化	146
第十四课	日本的庭园文化	155
第十五课	日本的动漫文化	164
第十六课	日本的美术文化	174

第十七课	日本的皇道文化	183
第十八课	日本的纸文化	201
第十九课	日本的香道文化	210
第二十课	日本的演剧文化	219
第二十一课	中国文化与日本文化	228

第一课 日本文化的杂种性

一、《日本文化的杂种性》简介

《日本文化的杂种性》是日本著名学者、评论家加藤周一的代表性著作，日文原名『雜種文化』，是加藤周一法国留学回来之后，1955年在《思想》杂志6月号、7月号上分别发表论文《日本文化の雜種性》和《雜種的日本文化の課題》，1956年因《雜種的日本文化の希望》合刊发行，1956年在日本雄辩会讲谈社以《雜種文化—日本の小さな希望》为题出版，再后来题目改为《雜種文化》。加藤周一在该著作中提出“英法文化是纯种文化，有自己的文化结构；日本文化是杂种文化，也有自己的文化结构”，由此，“雜種文化论”引起广泛关注和思考，逐渐成为一种定论，加藤周一也以“日本文化的杂种性”为轴心的理论而确立了自己在日本思想界和文化界的权威地位，被誉为“日本文化天皇”¹。《雜種文化》自1956年在日本出版后，至今已经再版20多次。中文译本主要是1991年吉林人民出版社出版的杨铁婴翻译的《日本文化的杂种性》。

二、加藤周一简介

加藤周一(1919.9.19—2008.12.5)，日本医学博士、著名学者、评论家、小说家、思想家。历任日本上智大学教授，美国耶鲁大学、布朗大学讲师，德国柏林自由大学、德国慕尼黑大学、美国加利福尼亚大学、英国剑桥大学客座教授，加拿大英属哥伦比亚大学教授，日本立命馆大学国家关系学部教授、立命馆大学国际和平博物馆馆长，东京都立中央图书馆馆长等各种职务，还于2004年与著名哲学家鹤俊见辅、著名文学家大江健三郎等共同组建市民团体“九条会”²。

加藤周一，1919年毕生于日本东京都涩谷区涩谷市，1943年毕业于日本东京

1 转引自《环球时报》2000年12月22日第十三版《日本杂种文化与现代化—叶渭渠与加藤周一对话》。

2 日本现行宪法第二章第九条规定：日本“永远放弃国家主权发动的战争、武力威胁或使用武力作为解决国际争端的手段。为达此目的，日本不保持陆海空军和其他战争力量，不承认国家交战权。”最初由美国俄亥俄大学名誉教授查尔斯·欧巴比因1991年海湾战争在美国设立的。2004年6月10日，日本著名作家井上厦、大江健三郎、梅原猛、泽地久枝，著名评论家加藤周一，社会活动家小田实，哲学家鹤俊见辅，法学家奥平康弘，日本前首相三木武夫夫人三木睦子共9人组成了维护宪法第九条的“九条会”。自此，日本各地民间“九条会”不断涌现，至今已有各地各种“九条会”5000多个。

大学医学部，大学期间曾与诗人、小说家中村真一郎和福永武彦组织文学社“诗的早晨”，开始发表日语韵律诗歌作品。1947年发表与中村和福永的合著《一九四六：文学的考察》，引起日本文坛广泛关注，并成为《近代文学》杂志的一员。1951年赴法国留学，一边在巴黎大学从事血液学研究的同时，在日本的报纸和杂志上发表文学批评和文艺评论，1955—1956年发表“雑種文化论”而一举成名，1958年弃医从文，以荒正人主编的《近代文学》、花田清辉主编的《综合文化》、中野重治主编的《新日本文学》等杂志媒介为根据地，又提出“日本文化集团主义”等独特观点独立活跃于日本文艺理论界、文学批评界和文学界。

加藤周一总是立足国际视野展开文艺评论和社会批评，生前出版诗歌集、自传、小说、评论、译著等各种独撰著作53部，与他人合著作品15部，对谈集3部。其中最具代表性的作品有《日本文化的杂种性》（1956年）、《日本文学史序说》（上下卷，1980年）、《日本文化的时间与空间》（2007年）、《日本的内与外》（1969年）等，其中《日本文学史序说》获得1980年的大佛次郎奖、1993年的朝日奖，而且于2000年获得法国政府颁发的文化荣誉勋章。2008年因多器官衰竭在东京都世田谷区医院去世。

三、《日本文化的杂种性》原文精选（讲谈社，1982年，28—48页）

私は西洋見物の途中で日本文化のことを考え、日本人は西洋のことを研究するよりも日本のことを研究し、その研究から仕事をすすめていった方が学問芸術の上で生産的になるだろうと考えた。また日本に昔あった文化、現在日本のいたるところに転っている問題は、西洋の文化や問題よりもつまらないものではなく、却っておもしろい点がある、その点に注意しその点を発展させてゆかなかたのは、それにはそれ相応の理由があるとしても、少なくとも私自身の場合には怠慢であったと考えた。私はこれからその怠慢をとりもどす仕事をはじめつもりだ。昔の日本、また今の日本のどこがどうおもしろいかという具体的な内容は、その仕事の途中で少しずつはっきりしてくるはずである。ここで抽象的な原則論をふりまわしてみてもはじまらない。

しかし西洋見物から日本へかえってきたときに私の考えは原則の上でも少し変った。綿密に言えば、原則は変わらなかったが、日本文化の問題という一般的な面で西洋見物の途中で考えていたことと、かえってから考えたこととの間に、いくらか内容のずれが生じた。そのずれは、日本人は日本人の立場にたたなけれ

ばならぬという原則、つまり日本の西洋化を目標にして仕事をして日本問題は決して片付くまいという私の考えの原則をたてた上で、それでは日本人の立場とは何かというその内容に係っている。西洋見物の途中で私はその内容を西洋の影響のない日本的なものという風に考えた。そう考えたのは西洋の影響が技術的な面を除けば精神の上でも文化の上でもいたって表面的な浅ばくなものにとどまっていると考えたからである。私は身の回りに西洋の街を眺めていた。それは東京の西洋式の街とは似ても似つかぬものである。日本でそれに似たものを想出すとすれば、そこにだけはながい歴史を負った文化が形となってあらわれている。京都の古い軒並みを想出すほかはない。街とはかぎらぬ、セザンヌのまねと本物のセザンヌとを比較することは、誰にもばかばかしくてできない相談だろう。西洋見物の途中で日本の絵のことを想出すとすれば、北斎にさかのぼり、光琳にさかのぼるほかはない。日本の風土と古い歴史とに根ざしたものの考え方や感受性、また風俗習慣芸術の全体に対し自覚的にそれを取りあげようとする心の動きがおのずからおこる。もしそういう動きを国民主義というならば、私は西洋見物の途中で日本人の立場を考えたときに、その内容は、国民主義的であった。そしてそういう私の考えは、英仏両国に暮らしている間、英仏両国民の自国の文化に対する極端に国民主義的な態度によって、大いに刺戟されたのである。例はいくらでも報告されているから、ここにはあげないが、要するに英国的な特色は学問芸術から服装や生活様式の末端にまで及んでいるということ、英国の文化は日本でのように医学は外国式で美術はまた別の外国式だが生活様式は日本流だというような混雑したものではないということ、従って何事も軽薄でなくながい歴史を負っていておちついたものだということである。英国を仏国にとりかえても、およそ同じようなことがいえる。英仏両国に軽薄な現象がないわけではなく、そういうことはむろん程度の問題だが、少なくとも日本と比較する場合に、両国の文化が純粋に伝統的なものによって培われているということは、両国を旅行したことのあるほとんどすべての旅行者の注意することであろう。英仏にもそれぞれ違った形で違った領域に外国の文化に対する強い好奇心がある。しかしそれは多くの場合に自国の文化にとって欠くことのできない原理を外国に求めるということではなく、外国との接触によって本来の原理の展開を豊かにするというにすぎない。原理に関しては、英語の文化も、フランス語の文化も、純粋種であり、英語またはフランス語以外の何ものからも影響されていないようにみえる。そして多くの英仏人はそのことを多少とも自覚している。そこから一種の文化的国民主義が発達する。いくらか心理学に興味を持って

いる旅行者は当然そういうことに気がつくであろう。従って日本人もまた彼らのように文化問題について国民主義的でなければならぬという結論が出やすい。事実そういう結論は昔から何度も出たし、現に私も西洋現物の間そういう結論に傾いていた。しかしそれはまちがっているということがわたしの場合には、誇張していえば日本へかえるの船の甲板から日本の岸をはじめてみたその瞬間にはっきりしたのである。

日本の第一印象というべきものはこうであった。海に迫る山と水際の松林、松林のかげに見える漁村の白壁、墨絵の山水がよく伝えられているあの古く美しい日本、これは西ヨーロッパとは全く違う世界であるということが一つ、しかし他方では玄海灘から船が関門海峡に入ると右舷にあらわれる北九州の工場地帯、林立する煙突の煙と熔鉱炉の火、活動的で勤勉な国民が作りあげたいわゆる「近代的」な日本、これは東南アジアとは全く違う世界であるということがもう一つ。神戸に上陸したときの印象も全く同じものである。神戸もマルセーユとも違うが、シンガポールとも違っていた。外見からいえばシンガポールの方が神戸よりもマルセーユに近いが、それはシンガポールが植民地だからであって、シンガポールの西洋式の街はマレー人が自分たちの必要のために自分たちの手でつくったものではない。そういう植民地にとっての問題は、原則としては、はっきりしている。植民地か独立か、外国からの輸入品か国産品か。もしそういうところで文化が問題になるとすれば純粋に国民主義的な方向でしか問題になりえないだろう。ところが神戸では話がそう簡単にゆかない。港の棧橋も、起重機も街の西洋式建物も、風俗も、すべて日本人が自分たちの必要をみとすためにみずからの手でつくったものである。シンガポールの西洋式文物は西洋人のために万事マルセーユと同じ寸法でできているが、神戸では日本人の寸法にあわせてある。西洋文明がそういう仕方ではアジア根をおろしているところは、おそらく日本以外にはないだろうと思われる。マレーと違うし、インドとも中国ともちがう。そのちがいは、外国から日本へ帰ってきたとき、西ヨーロッパと日本とのちがいよりもはるかに強く私の心を動かした。西ヨーロッパで暮らしていたときには西ヨーロッパと日本とを比較し、日本的なものの内容を伝統的な古い日本を中心として考える傾きがあった。ところが日本へ帰ってきてみて、日本的なものは他のアジアの諸国との違い、つまり日本の西洋化が深いところへ入っているという事実そのものにも求めなければならないと考えるようになった。ということは伝統的な日本から西洋化した日本へ注意が移ってきたということでは決してない。そうではなくて日本の文化の特徴は、その二つの要素が深いところで絡んでいて、

どちらも抜き難いということそのこと自体にあるのではないかと考えはじめたということである。つまり英仏の文化を純粋種の文化の典型であるとすれば、日本の文化は雑種の文化の典型ではないかということだ。私はこの場合雑種という言葉によい意味も悪い意味もあたえない。純粋種に対しても同じことである。よいとか悪いとかいう立場にたてば、純粋種にも悪い点があり、雑種にもおもしろい点があり、逆もまた同じということになるだろう。しかしそういう問題に入るまえに、雑種とは根本が雑種だという意味で、枝葉の話ではないということをはっきりさせておく必要がある。枝葉についてならば英仏の文化も外国の影響を受けていないところではない。インドや中国の場合にはなおさらであって、日本の文化を特に区別して雑種の典型だという理由はない。(インドや中国のことはもう少し調べないと断定的なことはいえないが、私の今までに知る限りでは日本の場合と著しく違うように思われる。)

簡単な例を一つとろう。西洋種の文化がいかに深く日本の根を養っているかという証拠は、その西洋種を抜きとろうとする日本主義者が一人の例外もなく極端な精神主義者であることによくあらわれている。日本精神や純日本風の文学芸術を説く人はあるが、同じ人が純日本風の電車や選挙を説くことはない。そんなことは不可能だからであり、日本風といわれるものは常に精神的なものばかりである。現に日本の伝統的文化をたたえるその当人が自分の文章を毛筆ではなくてペンで書き、和とじではなくて西洋風の本にこしらえ、その本の売れ行きについては、英国で典型的に発達し日本では「ゆがめられた」といわれるかの資本主義機構の作用を感じている。書齋では和服かもしれぬが外へ出るときは洋服である。つまり日本人の日常生活にはもはやとりかえしのつかない形で西洋種の文化が入っているということになる。政治、教育、その他の制度や組織の大部分も、西洋の形をとってつくられたものだ。くどいようだが、経済の下部構造が「前近代的要素」をひきずりながらもとにかく独占資本主義の段階に達している今日、精神と文学芸術だけが純日本風に発展する可能性があると考えるのは、よほどの精神主義者でなければ難しいだろう。日本主義者は必ず精神主義者となり、日常生活や下部構造がどうあろうと、精神はそういうものから独立に文化を生み出すと考えるほかはない。ところが念の入ったことに、そう考えた上で行う議論の材料つまり立論に欠くことのできない概念そのものが、多くは西洋伝来の、和風からは遠いものである。自由とか人間性とか、分析とか総合とか、そういう概念を使わずに人を説得する議論を組み立てることは、議論の題目によっては不可能であろう。日本の文化の雑種性を整理して日本的伝統にかえろうとする日本

主義者の精神がすでにほんやくの概念によって養われた雑種であって、ほんやくの概念を抜きとればたちまち活動を停止するにちがいない。日本の伝統的文化を外国の影響から区別して拾いだすなどということは、今の日本では到底できるものではない。

大衆はそれをよく心得ている。だから雑種をそのままの形で受け入れ、結構おもしろく暮らす方法を工夫しているが、雑種を純粋化しようなどという大それた望みはもたないのである。ところがいわゆる知識人は大望を抱いて起ちあがる。知識人が文化問題に意識的であればあるほど、日本文化の雑種性をどの面でも攻撃し、できればそれを純粋化したいという考えに傾く。明治以来の複雑な文化運動の歴史は、もし一言でいうとすれば、このような文化の雑種性に対する知識人の側からの反応、つまりその純粋化運動の歴史にほかならない。そしてそのかぎりでは必然的に失敗の歴史であった。

日本文化の純粋化運動は、ひとまず図式的に二つの型にわけて考えることができる。第一の型は日本種の枝葉をおとして日本を西洋化したいという念願にもとづき、第二の型は逆に西洋種の枝葉を除いて純粋に日本的なものを残したいという念願にもとづく。しかしいずれも成就するはずのない念願である。日本種の枝葉を切り落とそうとする純粋化運動はたとえそれがうまくいっても幹と根を養っている日本的要素を除くことはできない、それができないから、しばらくするとまた日本種の枝葉が出てくる。従ってその次に、いっそ西洋種の枝葉を除いて日本風に体裁を整えようとする運動のおこるのが当然である。ところが、その場合にも幹と根の雑種性はどうにもならず、やがて西洋種の枝葉の再生してくるのを防げないから、この作用と反作用の連鎖はとめどもなくつづく。明治以来日本の文化を純粋に西洋化しようという風潮がおこると、日本的なものを尊ぶという反動が生じ、二つの傾向の交代は、今にいたってもやまないように見える。

こういう悪循環を断ち切るみちはおそらくひとつしかないだろうと思われる。純粋日本化にしろ、純粋西洋化にしろ、およそ日本文化を純粋化しようとする念願そのものを捨てることである。英仏の文化は純粋種であり、それはそれとして結構である。日本の文化は雑種であり、それはそれとしてまた結構である。たとえそれが現在結構でないとしても、これから結構なものにしたててゆこうという建前にたつのである。そんなことができるかと人は言うかもしれないが、やってみなければ分からないし、またその他にやりようがあるわけではないだろう。図式的に言えば、結論はそういうことになる。しかしいうまでもなく、実地の問題は図式ほど簡単ではないのであって、結論にいたるまでに、もう少し詳しく日本

文化を純粋化しようとする運動をその実情について眺めておく必要がある。

日本の西洋文化との接触は維新前後に外からの強制と内からの技術的必要に刺戟されておこった。明治思想の中では、例外的な場合を除いて、西洋文化の摂取、日本の西洋化という過程と、国民主義的理想とは、すでに対立の契機を含みながらも、主として持ちつ持たれつという関係を保っていた。西洋文化とは主として技術文化であり、技術文化は国民主義の道具としてそれを強めるために役くれたからである。和魂洋才という言葉は明治の文明開化の思想が富国強兵の理想といかに密接にむすびについていたかをよく示している。

しかし摂取すべき西洋文化がひとたび技術制度の領域を超えて精神の領域に及べば、富国強兵の理想と折合わず、それよりももっと手のこんだ深い意味での国民主義的反作用をよびおこす。その典型的な例はキリスト教輸入の場合であろう。反作用が常にあまりにも大きすぎたから、キリスト教の影響はかぎられた小範囲にとどまったとさえいえる。(もし、その影響が広い範囲にわたっていたら、その後の日本の文化の歴史は変わっていたはずである。しかし、そういう想定をするためには、多分明治という時代はおそすぎるのであり、日本のキリスト教化の機会は、おそらく十九世紀末の東京においてではなく、十六世紀後半の九州においてすでに失われていた。)

しかし、一般的に技術制度の輸入があるところまでですすみ、輸入されたものが自発的にうごきはじめると、キリスト教のように受け入れる側の精神の変革を直接に迫らないにしても、間接にその生活感情の変化を必然的にする。風俗習慣が変わり、道徳や美意識が伝統的なものからある程度まではなれてくるだろう。和魂洋才という原理は文明開化のはじめの時期のようにもはや簡単には成立しない、和魂は意識的にまもらなければならないものとなり、しかも純技術的な領域以外のあらゆる西洋化に対立することによってしかももりえないものとなる。日本文化を純粋化しようとする運動の一つの型としての国民主義は、そのときはじめてあらわれるわけだ。

そして一つの型のあらわれる時は、同時にもう一つの型のあらわれるときである。なぜなら技術制度の輸入の次には、輸入された技術制度の生み出した社会の中で生きてゆくために必要な思想の輸入がはじまるからである。洋才と和魂との矛盾が洋魂の理解を刺戟し、するどく国民主義と対立しながら、日本の文化を広く西洋化しようとする運動となってあらわれる。例えば、洋楽は和楽に、洋画は日本画に、ほとんど橋わたしの不可能なような形で対立する。感受性と美意識の領域ですでにそうであるとすれば、同じ原理が道徳の領域、従ってまた社会

的諸問題の領域に及ばないはずはない。なりゆきの赴くところ日本の社会の西洋化という考えは、やがて歴史主義の導入されるに従って、決定的に強い影響力を持つようになる。歴史主義、または歴史的なものの見方によれば、日本の西洋化とは日本の近代化である。なぜなら順を追ってすすむべき歴史の発展階段の西洋はすすんだ段階にあり、日本はおくれた段階にあるからである。おくれは取り戻さなければならず、日本のなかの封建性または前封建性は清算して、国を純粹に近代化しなければならない。文化を純粹化しようとして、国民主義的方向に傾かない人々は、そういう意味での近代主義に傾き、二つの傾向はそれぞれが徹底するに従っていよいよ激しく対立するであろう。

最近の文化運動のなかにあらわれたさまざまな対立的要素、たとえば伝統的な趣味と革新的な趣味、非歴史的なものの考え方と歴史的なものの考え方、社会に対しての保守的な立場と進歩的な立場、そういう対立的要素の大部分は、西洋文化と日本文化との関係という点からみると、以上の二つの型、国民主義と近代主義との対立に還元されるように思われる。そして三つの型がいちばんはっきりした形でいちばん大がかりな規模であらわれたのは、いうまでもなく戦争中と戦後の被占領期間殊にそのはじめの時期である。（はじめの時期というのは敗戦後、せまくとれば四七年の二・一罷業弾圧まで、ひろくとれば五〇年朝鮮戦争のはじまるまでだが、ここではそのちがいを問題とする必要はない。）戦争前までは、国家権力が組織的に文化のあらゆる領域に介入するという事はなかった。天皇制を中心とする富国強兵策の教育は徹底していたが、たとえば思想文学芸術の領域では、権力の介入が必要に応じての弾圧にとどまり、戦争中の「精神総動員」のように積極的な性質はもっていなかった。文化を日本的な伝統に基づいて純化しようという文化的国民主義は、文化の雑種性に対する一部の知識人の反応であって、大衆とは深い関係がなく、権力もそういうことに熱心ではなかったといえる。ところが戦争と共に精神も動員された。文化的国民主義は政治的な国家主義を強めるための道具として権力に積極的にたすけられ、未曾有の大がかりな規模で強調された。文化上の国民主義はもはや一部の知識人の道楽ではなく、大衆と一種のつながりを持つようになった。そしてそういう「国民精神総動員」に対し、戦後には「日本の民主化」が全くちがう権力を背景として大がかりな規模で展開されたのである。大衆とのつながりは、今度は戦争中の場合と違って、大衆の側からの自発的な支持をもととしている、ということが、少なくともある面ではいえなくはない。いずれにしても文化問題は、戦争をきっかけとして、自覚的にまた組織的に扱われるようになった。そうすると期せずして日本の

文化の性質そのものに由来する二つの反応の型、国民主義的な型と近代主義的な型とが、全く典型的にもはや疑う余地のないほどはっきりした形をとって相次いであらわれてきたのである。

話を思想と文学の領域にかぎれば、戦争中の「国民精神総動員」、つまり戦争を正当化するために天皇を祭りあげると同時に日本文化を祭りあげるという仕事をひきうけたのは、おもに京都の哲学者の一派と日本浪漫派の一派であった。そこで西洋の哲学によって訓練された方法を使って哲学者たちは、天皇制を「近代化」したのである。国学者流のみそぎだけでは、近代的な戦争イデオロギーとしては役に立たない。いわゆる「超国家主義」そのものが舶来の道具で組み立てられるほかはなかった。純粹日本主義者にとって不都合極まるこういう事情は、しかし決してあたらしいものではなく、維新前後の尊皇攘夷論の発展の経過のうちにもすでに示されていたといえそうである。伝統的な封建的社会秩序とむすびついた尊皇論は、封建制に対立して近代的な国家主義をつくりだそうとする革新的な尊皇論に発展することで時代の要求に応じるほかはなかった。つまり伝統的な日本文化の遺産だけにたよってはいは、明治の富国強兵的国家主義をつくりだすことさえもできなかつたということになる。なぜならばその場合の国家の概念そのものが「先進国」で歴史的につくりあげられたものであったからだ。そのとき和魂洋才ということが原則として通用したのは当事者の主観においてにすぎない。今から振り返ってみれば、そのときすでに輸入を必要としていたのは、西洋の技術制度だけではなく、それによってある程度まで西洋化した社会を統一するために必要な国家の概念そのものであった。その後半世紀、「資本主義最後の段階としての帝国主義」戦争の時代に、素朴な富国強兵的国家主義を普遍化し合理化して「大東亜共栄圏の理論」をこしらえる必要が生じたとき、そのための方法がもはや国学ではどうにもならなかつたのは当然であろう。果たしてドイツ哲学の影響を受けた京都の哲学者が「動員」され、弁証法も重宝に使い、ゲオポリティークも便利に応用して、用を弁じるということになったのである。大東亜共栄圏の理論その他は本来日本的なものであるどころか、いたってハイカラなものだ。伝統的な概念的枠組だけから日本とその伝統的文化の世界史的使命などという考え方が出てくるわけがない。みそぎについていえば、私も今でも懐かしく思い出すが、みそぎにひっかかしたのは何人かの素朴な文学者だけであつた。

日本浪漫派は、京都の哲学者と同じようにハイカラな要素もかなり含んではいたが、哲学者よりはうまくやった。それには文学の領域に強敵がいなかつたと

いうことも深くからんでいる。戦前すでに左翼文学は弾圧されて影をひそめていた。従って当時の文学には社会的な拡がりがなかった。また社会的な拡がりがないばかりでなく、日本文学の伝統からほとんど何ものもうけつがず（日本の伝統からさえ何もうけつがないのであるから、外国の伝統から何かを受け継ぐなどということは論外である。）思想的にも美学的にもほとんど背景らしい背景をもっていなかった。作家はその私生活を一種の方言で報告し、作家志願者がそれをよむ、それ以外の人間がよんでも第一に生活がちがい、第二に関心をもつ対象がちがうから、全く要領をえないというのが、戦前の文学の特徴であった、といってもよいだろう。ところが日本浪漫派は、多くの人の関心が戦争と戦争をするために必要な天皇制に向かったときに、正にその天皇制をとりあげたのである。しかもそれを日本文学の歴史の中で取り上げ、ある程度まではそこから独特の修辞法をひきだすことにさえ成功した。かれらの文学は一種の思想的美学的背景をもち、大衆的関心の対象をとりあげることによって大衆とのつながりを回復したといわなければならない。そしてそういう仕事は、西洋風の論理や方法を通じてではなく、むしろ逆に非合理的な独特の日本語の修辞法を通して行われたから、日本文学を日本的なものに純化するという仕事は、少なくとも形式的には整った文学の特殊なせまい領域では、そういうことも不可能ではない。殊に問題の文学の思想的背景が権力によって保たれ、読者がさしあたってその信憑性を問題としない場合にはそうである。ところがそういう条件がなくなると、つまり戦争が終わると、日本浪漫派には懐疑的な読者を説得し、反論にうちかち、自己の思想的立場をまもるために必要な理論がない、ということがあきらかになった。独特の日本的修辞法は戦後のあらゆる問題に対して少しも役にたたないということが、忽ち曝露されたのである。日本の文化を日本の伝統的な方向に純粋化しようとする日本浪漫派の運動は、戦争中の特殊な条件によりかかることによつてのみ一時的に成功する可能性をもっていたということが出来る。それが一時的に終わったのは決して偶然ではなく、それ自身のうちに一時的に終わるべき決定的な理由をはじめからもっていたのだ。伝統的な日本文学を西洋文学の影響に対立させて、伝統をまもろうという考え方は、必然的に失敗する。なぜなら日本の社会がすでにある程度まで西洋化しているという事実を無視することは結局不可能だからである。またそういう考え方は、必然的に反動的となる。なぜなら西洋伝来の要素を除くために社会の近代化の過程そのものの進行を妨げる他ないからである。反動的にならない場合には、誰がいつの時代にどう工夫してみても、永井荷風に典型的なように、時代と社会からの逃避となるであろう。